OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞山口堯二著『日本語接続法史論』
Author(s)	高山, 善行
Citation	語文. 1998, 71, p. 49-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68938
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

山口堯二著『日本語接続法史論』

高山善行

本書は、接続法の史的研究に関する研究書である。接続法について、著書は既に、『古代接続法の研究』（昭和五十五年、明治書院以下「前著」と呼ぶ）を公表している。研究テーマは共通するが、前著では共時的研究が中心であったのに対して、本書では通時的研究が中心となっている。接続法の推移が上代語から現代語に至るまで通史的に考究されているのである。

本書の構成は次のとおりである。

第一編　接続表現の広がり
- 第一章　上代語の文と句の連接
- 第二章　古文における接続表現――順接と逆接――
- 第三章　順接仮定条件の飛躍的な連接法
- 第四章　現代語の順接仮定表現

第二編　接続法の推移
- 第五章　複文の構成・史的考察
- 第六章　接続助詞の分析化と接続詞の形成
- 第七章　条件表現の起源
- 第八章　指定辞を取り込む分析化とその周辺
- 第九章　逆接仮定表現の末流
- 第十章　格助詞起源の接続助詞とその周辺
- 第十一章　原因理由表現の推移傾向

第三編　「現実仮定」の表現性
- 第十二章　「ことめでば」「こととならば」考
- 第十三章　同語反復的仮定表現の情意性
- 第十四章　「よしさらば」小論
- 第十五章　「さりとも」と「さりとて」
- 第十六章　逆接仮定の限度超過表現

以下本書の内容において核になる章を取り上げながら、全体を見ていくことにしよう。

第一編では、上代から現代に至る接続表現の変遷の実態について述べられている。第二章では、「順接」「逆接」「仮定」「確定」という一般的な概念によって条件表現が整理されている。前著では「順接」「逆接」という概念は重視されていなかった。今回、一般通用の概念を用いることによって、接続表現の全体像が理解しやすくなっている。専門外の読者はこの章から読み始めればよい。第三章では、「此国にむまれぬるとならば、なげかせたてまつらぬほどまで侍らで、過ぎ別れぬる事、返々本意なくこそおぼえ侍れ」（竹取物語）のように、順接仮定条件で順当な帰結の顕れない連接表現を取り上げる。直感的に、「個別的な筆の逸れ」と見てしまっていたこの種の表現が、実は社会的に許容されていた表現であることを実証している。本章では、古文を解釈するとき、直感に依存したり、安易に誤写の可能性を考えることの陥穽が示される。文法の知識の必要性を再確認する意味で、古典文学の研究者にとっては必読の章と言えよう。

第二編は接続法の推移の実態とその根底にある原理について考究されており、本書の中心をなす部分である。複文構成に関する総論（第五章）をふまえて、各章で詳しい検討がなされている。本編において、最も重要な概念は、「句的判断の対象化」（前句の判断を後

句との相関にそなえて自覚的に捉えること、対象化すること）である。第六章では、この概念を用いて、接続形式の推移が統一的に説明される。接続形式は、文脈依存的なものから形式明示的なものへと推移し、分析化していく傾向が認められるが、それらはいずれも「句的判断の対象化」を強める方向に変容しているという。その流れの中で、「なり」「たり」という助動詞や「もの」「から」など形式名詞が接続形式に組み込まれていく過程が鮮明になる。今後は、本編で示された見通しのもとで、助詞、助動詞等の個別研究と連携しながら、より細密に分析が進められていくべきであろう。格助詞が接続助詞に変容する過程、接続詞の成立する過程、原因理由表現の変遷など、本編は認知言語学の立場においても興味深い事実と論を提供している。

第三編では、「現実仮定」に関する個別的な問題が考究されている。個別的な問題ではあるが、いずれも接続法の本質につながってくるものである。どの章も興味深いが、ここでは、本書で書き下ろされた、第十五章、第十六章を見てみよう。第十五章は、これまであまり注目されていなかった「さりとも」「さりとて」について論じられている。「さりとも」と文末助動詞との共起について指摘され、叙法副詞との連続性が示唆されている。このような連語形式の分析は従来の研究では不十分であり、今後進めていく必要がある。第十六章では、「いかに〜とて」「なんぼなんでも」「いくらなんでも」の分析を通じて逆接仮定における不定詞の働きを明らかにしている。「限度超過表現」という問題設定そのものが斬新で、著者ならではの切り口と言えよう。不定詞については、『日本語疑問表現通史』（平成二年、明治書院）での成果が活かされている。

本書の全体を通じて、著者の立場は一貫している。著者は言語現象の連続性を重んじる。機械的な分類、振り分けをせず、言語現象の連続するあり方を大切にする。そして、単に事実を羅列するのではなく、常に言語現象の説明、解釈を試みている。一見、当たり前のことのようだが、従来国語学の研究の多くが、分類至上主義、事実羅列主義であったことを思えば、著者のような立場はむしろ少数派であると言っていい。現象の説明、解釈は本書の最も魅力的な部分であり、著者と読者とが一戦を交える場でもある。

説明の仕方について言えば、本書では文構造の記号による表示法（第七章以下）が導入されている。この表示法を説明上の工夫とだけ見てしまっては、本質を見落とすことになる。前著の論が意味中心であったのに対して、本書では構造面が重視されていることに注意しなければならない。推移は構造の変容として把握される。著者は文構造と表現主体の分析意識との相関という観点から推移を捉えようとする。新たに用いられた説明法は方法論からの要請であった。この方法により、係り結びと接続法との連絡が果たされている点は、本書においてきわめて重要である。

近年現代語の研究において複文研究が盛んになりつつあるが、本書の著者は既に前著の段階で体系的な複文研究の枠組みを提示していた。爾来着実に研究を積み重ね、その成果を本書において結実させたのである。ときに著者の論考は難解と評されることがある。しかし、他の論考と同様、本書に関してもその評は全く当たらないであろう。もし難解さを感じるなら、それは直ちに読者の力量不足を意味することになる。質の高い論考は常に読者の力を試すものである。（一九九六年三月、和泉書院、三〇二頁、本体価格九〇〇〇円）

付記　本書については、小林賢次氏による書評（『国語学』第一九〇集、平成九年九月）があり、本書の内容を理解する上で参考になる点が多い。

――大手前女子大学助教授――